

II בְּרֵאשִׁית



創世記 2 章 21 節

בְּרֵאשִׁית ^{ベレ-シート} II 創世記 2 章

神である【主】は、深い眠りを人に下された。

それで、人は眠った。

主は彼のあばら骨の一つを取り、

そのところを肉でふさがれた。

(創世記 2 章 21 節)

「あばら骨」が何であることを論証します。



創世記 2 章を学ぶ上で大切な視点

ヨハネの福音書 5 章 39 節—40 節

39 あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思って、

聖書を調べています。その聖書は、

わたしについて証しているものです。

40 それなのに、あなたがたは、

いのちを得るためにわたしのもとに来ようとはしません。

ユダヤ人たちは、聖書に一度しか出て来ない「永遠のいのち」

(ダニエル書 12 : 2) について研究していたのですが、

イエシュアは、「聖書は、わたしについて証しているもの」と

語りました。これは、最も大切な事柄です。

パウロがイエシュアと出会って最初に目が開かれたのは、

キリストによって聖書を読むということです。

パウロは、死んだはずのイエシュアから声をかけられています。

(使徒 9 : 4) イエシュアは死からよみがえられた初穂として、

神である方が最初の被造物になられたことを、パウロは

創世記の冒頭から悟ったのです。(Iコリント 15 : 20)

ベレーシート

その被造物の最初の初穂によって **בְּרֵאשִׁית**、

バーラー

神と人がともに住む家を創造する **בְּרֵאשִׁית** というのが

創世記 1 章 1 節であり「 聖書のタイトル 」となっています。

パウロは、キリストの鍵によって聖書を読んだ時、

「 イエシュア 」という方が、

神様のご計画を実現するメシアだと悟り、同胞たちに伝えたのです。

私たちも聖書を正しく読むために、必ずイエシュアを踏まえます。

聖書は「 イエシュア 」という鍵を入れることで、

いのちが入るからです。

創世記 2 章を学ぶ上で大切な視点

イザヤ書 34 章 16 節

【主】の書物を調べて読め。これらのもののうち、どれも失われていない。それぞれ自分の伴侶を欠くものはいない。それは、主の口がこれを命じ、主の御霊がこれらをつめたからである。

創世記を理解するには、創世記だけでは不十分です。

なぜなら聖書は預言的な書だからです。

創世記は預言書ではないのに、なぜ、預言的というのですか？

と質問が出そうですね。

預言は預言書、トラーであれば教えや律法、歴史なら歴史書と

都合の良いカテゴリーで思い込んでいると、本質を理解できません。

神様のことばは、いのちであり霊であり預言だからです。

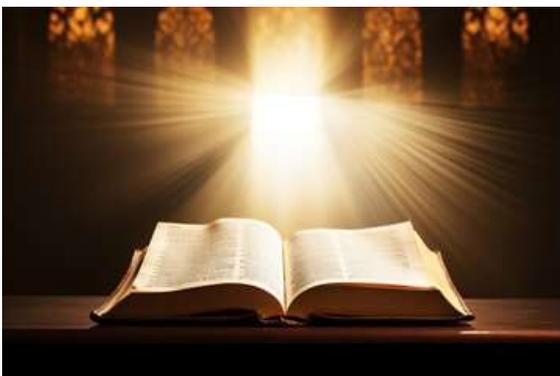
先に語られたことが後に起これば、そのことばは預言です。

たとえば、創世記 3 章 16 節の女に対して語られた

「あなたは苦しんで子を産む」ということばも、終わりのことを伝える預言の箇所です。不思議です。終わりのことを最初に告げています。

最初に告げられた創世記は最後の事柄の預言だということです。

様々な箇所には、伴侶のようなことばが隠されていて、



この組み合わせが理解を深めていきます。

その伴侶に導くのが聖霊です。

創世記 2 章を学ぶ上で大切な視点

イザヤ書 46 章 10 節

わたしは後のことを初めから告げ、まだなされていないことを昔から告げ、(これを別なことばで言うと)『わたしの計画は成就し、わたしの望むことをすべて成し遂げる』と言う。

(パラレリズム修辞法)

二つのパラレリズムが使われています。

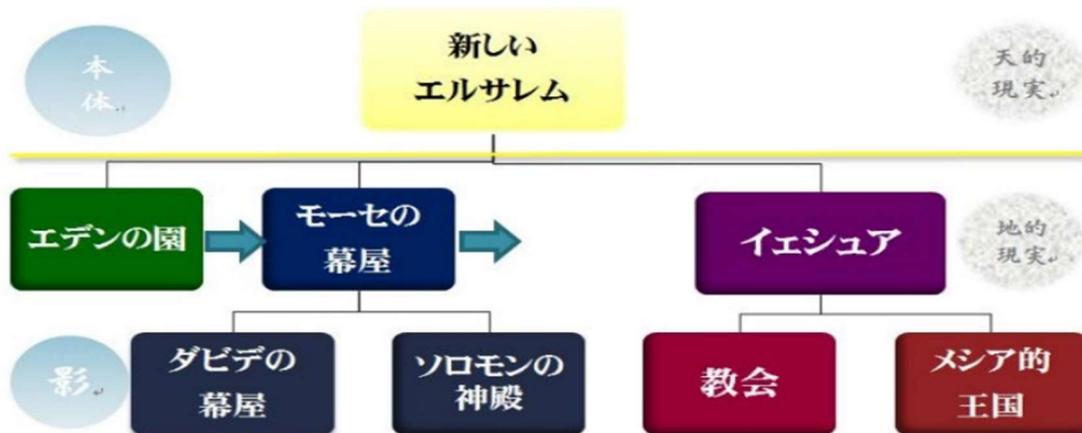
神様のなさることは、歴史の最初に語られて、必ず成し遂げられます。

聖書は、イエシュアによってなされる神様のご計画が記された一つの書です。 新約聖書だけでは、意味をなしません。

聖書には本体と本体の写しと影があり、エデンの園も本体の写しです。本体は聖書の最後に啓示される「新しいエルサレム」です。ここからすべてが始まっているのです。

本体である「新しいエルサレム」がどのように成立するのか、神様は歴史の中で示しておられます。

「エデンの園」から「モーセの幕屋」、そして「神殿」に変わり、



さらに、「教会」に発展し、それが「メシア王国」となり、

地の写しが完成します。そして、

本体である「新しいエルサレム」が地に降りて来て完成です。

地（エデンの園）は、創世記 3 章から黙示録 20 章（メシア王国の最後）までのろわれています。しかし、メシア王国の千年が終わり、地は完全に癒されて「新しいエルサレム」が地に降りてきて、私たちはエルサレムの住人となるのです。

前回の復習

(1) 「わたしは人のために、ふさわしい助け手を造ろう。」

神である主が人に、「人がひとりであるのは良くない。

わたしは人のために、ふさわしい助け手を造ろう」と言われました。

なぜ、人がひとりであるのは良くないといわれたのか。

そこには「三一の神」の交わり神秘、奥義が隠されていました。

神そのものが「一」でありながら交わりの存在です。

神の本質が交わりの姿であるゆえに、人がひとりであるのは良くないのです。人は神を表現するために造られた器だからです。

神を表現する人が交わりを持たずに一人であるのは良くないのです。

そこで、助け手を造ろうと言われました。

(2) 「しかし、人にはふさわしい助け手が見つからなかった。」

神が連れて来たすべての家畜、空の鳥、すべての野の獣の中に

人の「ふさわしい助け手」を見つけることができませんでした。

神である【主】は、わざわざ家畜、空の鳥、すべての野の獣を連れてきて他の被造物では助け手が見つからないことを教えました。

被造物に名前を付けることで、よく観察させ、生き物の独自性を把握するように深くかかわらせたわけです。

しかし、生き物の中には、ふさわしい助け手が見つかりません。

なぜなら、彼らには、霊がないからです。

このことは極めて重要です。

人にとって不可欠な助け手とは、同じ霊を持った者だからです。

人が一人でいるのは良くない根源的理由は、

神が霊であること、神が永遠の存在の交わりであるということです。

相互内在の神の交わりの中に似せて人は造られています。

ですから人が一人でいるのは良くないのです。

人が真の助け手を得るには、神と人が同じ霊を持つように、

人と人の間にも、同じ霊を持つ存在が必要なのです。

これが本日のテーマです。

人のためのふさわしい助け手として「女」が登場します。

生物学的な「女」と安易に考えてしまうのは、

「人」が男性だからです。

しかし、ここで言う「ふさわしい助け手」には、

より深い意味を含んでいます。それは、

助け手の唯一の条件は、霊的な存在であるということです。

「花婿なるキリスト」にとって花嫁エックレーシア（教会）

は、霊的な存在であり、花婿を支える花嫁も助け手として存在します。

ここに「三一」が反映されています。

「花婿と花嫁」「キリストと教会」だけではなく、

ここを結び付けている、もう一つの存在が御霊です。

聖霊も人にとっては助け手になるわけです。

黙示録の 22 章 17 節「御霊と花嫁が言う 来てください」と

花婿に対して呼びかけていますね。

創世記 2 章 21 節

神である【主】は、深い眠りを人に下された。それで、人は眠った。

主は彼のあばら骨の一つを取り、そのところを肉でふさがれた。

そこで、神である主は人を深い眠りに落とされた。人が眠り込むと、

そのあばら骨の一つを取り、そこを肉で閉ざされた。

(聖書協会共同訳)

ハ-アー-ダーム アル タルデー-マー エロー-ヒーム アドナイ ヴァヤツペール
וַיִּפֹּל יְהוָה אֱלֹהִים | מִתְרַדְמָה עַל-הָאָדָם
その人の上に 深い眠り 神である主は 落とした(下した)
נָפַל

ミツアル-オー-ターヴ アハット ヴァイツカハ ヴァイー-シャーン
וַיִּישָׁן יְהוָה אֶת מִצְלַעְתּוֹ
あばら骨(女複) 一つを それで すると
彼のあばら骨から 彼(主)は取った 彼(人)は眠った
צְלָעוֹת

タフッテンナー バーサール ヴァイスゴール
 תַּחֲתָנָה בְּשָׂר וַיִּסְגֹּר
 その代わりに 肉を そして
 (主) は閉じた

ヴァーヴ
 接続詞 **ו** が 4 つなので、4 つの文節です。

● 最初の文節は、

エローヒーム アドナイ ナーフアル
 אֱלֹהִים יְהוָה נָפַל
 神である【主】は **נָפַל** 落とした。

何を落としたかというと・・・

ハーアーダーム アル タルデーマー
 עַל־הָאָדָם תַּרְדֵּמָה
 その人の上に 深い眠りに落とした
 (或いは下したとなっています。)

● 二番目の文節は、

すると (接続詞) 彼は **וַיִּשָׁן** 眠った

彼というのは **עַל־הָאָדָם** その人 のことです。

「彼は眠った」で一つの文節です。

● 三番目の文節は、

ヴァイツカハ
וַיִּקַּח

ラーカハ
לָקַח「取る」ということばです。

ヴァイツカハ
この主体は神です。 神である主がוַיִּקַּח取った。

何を取ったかというと・・・

ミツアルオーターヴ
その人の מִצְלֵתָיו あばら骨から
エハット
אַחַת 一つを取った。

●四つ目の文節は、

ヴァイスゴール
וַיִּסְגַּר

サーガル
סָגַר「閉じる」ということばです。

誰が閉じるのかという「主が閉じる」

何で閉じるかという・・・ בָּשָׂר「肉」で閉じる

あばら骨を取った部分を 其の תַּחַת 代わりに肉で閉じた。

ということです。

— 21 節の大切な語彙 —

最も中心的な語彙は何だと思いませんか。

ラーカハ
וַיִּקַּח「取る」

15 節で、人をエデンに「連れて来る」という意味で使われ、

21 節、22 節、23 節にも繰り返されます。

「娶る 召す」という意味もあります。

人にふさわしい助け手を造るための神様の行為を表します。

タルデーマー

תַּרְדֵּמָה 「深い眠り (名詞)」

ラーダム

「רָדַם 熟睡する」が語源です。

ナーファル

נִפְלַח 「下された」 眠りに落とし入れると、

そのために人は眠った・・というということば、

ヤーシャン

יָשָׁן 「眠った」

ツエーラー

צִלְעָה 「あばら骨」、これは肋骨を表します。

エハット

אֶחָד 「ひとつ」

タフテンナー

タハット

תַּחְתָּנָה 「そのところを : תַּחַת (~の代わりに)」

肋骨がある場所を示すことばです。

バーサール

בָּשָׂר 「肉」

サーガル

סָגַר 「ふさぐ：閉じる 戸を閉める」

どれが一番重要だと思いますか。

タルデーマー

— תַּרְדֵּמָה 深い眠り —

なぜ神が、人を深い眠りに落とさなければならなかったのか・・・。

ラーダム

この語源 דָּרַם は「熟睡する 意識を失う」で、

タルデーマー

תַּרְדֵּמָה は、その意識の及ばないところで、

神の意志が表される時に用いられています。(旧約 7 回)

人間の意識の及ばないところで、神の意志が現わされるとは・・・

アダムが深い眠りに落とされた・・・

👉 アダムは一旦、ここで死んでいるのです。

アダムが死んで目を覚ますのは、

👉 第一のアダムではなく、第二のアダムです。

パウロは、「この人」はキリストで、女は教会だと解釈しています。

(エペソ 5 : 32)

「 聖書の眠りは死を意味します。」

ヤコブのことばです。

創世記 47 章 30 節

私が先祖とともに眠りについたなら、

エジプトから運び出して、先祖の墓に葬ってくれ。」・ ・

父イサク、そしてアブラハムとサラ、またイサクの妻のリベカの入る
先祖の墓に一緒に入れて欲しいと言っています。

眠りについたらとは、死んだらということなのですね。

石打ちの刑に遇うステパノの様子も記されています。

使徒の働き 7 章 60 節

そして、ひざまずいて大声で叫んだ。「主よ、この罪を彼らに負わせ
ないでください。」こう言って、彼は眠りについた。

ステパノは死ぬ前に、天におられる人の子のような方が立ち上る姿

を見ます。イエシュアの姿です。

そして彼は眠りについた👉死んだということです。

最後のアダムであるイエシュアについて、

パウロは「 今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。 」(Iコリント 15 : 20) と述べています。

初穂と表現したのが、パウロただ一人です。

死んだイエシュアは、被造物の中で最初によみがえられた存在だと言いました。 だから 創世記 2 章は預言書なのです。

預言は後に起る歴史を語るということです。

イエシュアのことばです。

「 聖書はわたしについて証している(ヨハネの福音書 5:39) 」

創世記 2 章を預言の書として捉えないと、

「 最初の間人 」だと思い込んでしまいます。

神は、「 その人 」を深い眠りに落ち入らせて、あばら骨を取り、女を造ったその後、目覚めさせて一体とさせるということです。

このような気づきが、聖書理解の進行方向を整えていきます。

パウロもこのように聖書を読んでいきました。

イエシュアと出会い、キリストという鍵を入れて聖書を読むことで、
「キリストと教会を表しているこの奥義は偉大だ」と
とんでもないことだと言うのです。

パウロがいなければ気づかなかったでしょう。

創世記 15 章 12 節に、再び「深い眠り」が出てきます。

神とアブラハムの契約で、アブラハムは深い眠りに襲われます。

その時、神のことばが彼に臨みます。

(意味がないように見えますけど・・・)。

アブラハムが寝ている間に、アブラハムの切り裂いた動物の間を
神が通り過ぎることによって一方的に契約成立です。

不思議な契約・・・、預言的な啓示です。

タンヌール ラッピード
תַּנּוּר וְלַפִּידִים の契約
かまど たいまつ

イスラエルの歴史における神様のご計画を、

「かまど：死」と「たいまつ：復活」で表象されています。

「かまど」を通させられるイスラエルの民が、

苦しみと試みの中を通させられることを示しています。

エジプトでの 400 年間の奴隷生活・・・

バビロンに移された 70 年間・・・

さらに、ローマによってユダヤ人たちは世界離散します。

そして、これから未曾有の苦難の 7 年間の時が待っています。

このような「かまど」から

イスラエルの民たちが解放されてくるわけです。

その解放された状態を「たいまつ」で表現しているのです。

出エジプト、バビロンからの帰還、反キリストによる未曾有の苦難から集めて元に戻すということです。

「かまど」と「たいまつ」を

創世記 1 章 5 節では、「夕があり、朝があった。」と記しています。

神様の御計画が進むリズム「死と復活」を表現しているのです。

「死と復活」の出来事

イエシュアを表す「死と復活」は、実は、

神にとって、何とも言えない心地よいものなのです。

幕屋の様々な儀式の多くが「死と復活」の概念を含んでいます。

「死と復活」は、神様が受け入れられる中枢的リズムであり
御計画を成就させていくリズムでもあります。

これが、「深い眠り」の奥義でもあります。

ツエーラー
— אַבְרָהָם あばら骨 —

ツエーラー
「אַבְרָהָם」は40回登場しますが、「あばら骨」と訳される

箇所は創世記2章21節と22節の2か所です。他では、

「脇間 とびら 側」等、建築用語、神殿用語として出てきます。

●幕屋の至聖所の東を除く三つの側（北、南、西）で構成される聖所
を建ち上げる立て板の側面を「側」といいます。

（出エジプト記25章～38章）

●ソロモン神殿（第一列王記6章）、

●千年王国における新しい神殿の幻（エゼキエル書41章）では

「脇間」とも訳されています。

ツエーラー
「אַבְרָהָם（あばら骨）」は建物を支える重要な語彙として扱われ

ています。神殿に関わる部分は、すべてキリストの表現です。

幕屋や神殿を建て上げるためになくなくてはならない ^{ツエーラー}  には、
目に見える建造に含まれた、本質的な意味があったのです。

^{ツァーラー}


足を引きずる

「あばら骨 ^{ツエーラー}  」の語源（動詞）は ^{ツァーラー}  「足を引きずる」。

面白いですね。

「あばら骨」と「足を引きずる」にどんな関係があるのでしょうか。これは、預言的なことばで、歴史の中で表されてきます。

ヤコブが「ある人」と戦いますよね。（創世記 32：24-32）

この「ある人」は、ホセア書 12：4では「御使い」です。

「彼（ヤコブ）はそのもものために足を引きずっていた」

（創 32：31）と記されています。

兄エサウと再会する際、ヤコブには長子の権利を奪ったという

恐れがありました。

恐れに支配されているヤコブを助けるために「ある人」が
神から遣わされました。

ヤコブ（たましいで生きている人間）は、どうしても恐れに支配され
ています。恐れはたましいからきますが、たましいでは全く処理で
きません。恐れに支配されたヤコブを助けるために、

「ある人（御使い）」が神様から遣わされたということです。

その「ある人」が、強情なヤコブを見て彼の股関節を打ち砕きま
す。股関節は人間を支える根幹の象徴ですが

格闘の中で股関節が外されました。

それまでヤコブを支えていたもの（股関節）に神が触れたのです。

頑丈なヤコブの股関節は、打たれて砕かれました。

ヤコブが弱いものに変えられた瞬間です。つまり、

助けを必要とする者に変えられたということです。

ヤコブにとって、霊的な変革を余儀なくされる出来事でした。

これをホーリネスでは「ペヌエル経験：自我が碎かれる」と言い
ます。「自我から解放されて生きる」聖めの話のテキストとな
る箇所です。

神である【主】が、人のあばら骨を取ったことと、

神がヤコブの股関節を外したことには共通点があります。

その共通点とは、人もヤコブも、

神あるいは、他者の助けなしには生きていけないとされた点です。

アダムが「ふさわしい助け手」なしには、与えられた使命を果たすことができないのです。最初のアダムが「ふさわしい助け手」

なしに一人でいるのは良くないとありますから

「ふさわしい助け手」がなければ、本来の使命を果たすことができないのです。また、

ヤコブが、神の助け手なしには使命を果せないこととも同義です。

それ故に「おまえはイスラエルだ」改名されます。

自分でつけたのではなく、その御使いが

「おまえは ^{イスラ-エ-ル}  イスラエル（神が支配する者）だ」と名付けます。

^{サー-ル}  支配する」の未完了形 ^{ヤー-サル}  に ^{エ-ル}  神が付いて

「神が支配する」となります。

ヤコブは「 イスラエル 」になり、イスラエルは
「 足を引きずる者（ゼパニヤ 3 : 19） 」になりました。

「 足を引きずる 」

とは、神の恵みの支配の中に置かれるということです。

それ以来ヤコブは、神のご支配の中にどんどん導かれて行きます。

さらに「 あばら骨 」の奥義として、

難解な節と言われるマラキ書 2 章 15 節は、

多くの訳と多くの解釈がなされている箇所ですが、

そこには「 あばら骨 」という語彙は無いものの

エハード
「一体」という語彙が登場します。

創世記にも「 あばら骨をとって女を造る 」すると「 一体 」と
なったという話があります。

「 あばら骨 」と「 一体 」となる・・・

何か察しがつくのではないのでしょうか。

では、マラキ書を読んでみます。

マラキ書 2 章 15 節

神は人を一体につくられたではないか。そこには、**霊の残り**がある。

その**一体の人**は何を求めるのか。神の子孫ではないか。

あなたがたは、自分の**霊**に注意せよ。

あなたの若いときの妻を裏切ってはならない。

ざんし

霊の残り（**残滓**）があるということです。

何のことを言っているかというと・・・

当時の祭司たちは墮落して、みことばを勝手に解釈していました。

祭司たちのみならず、自分の妻が気に入らなければ、

不信仰の他国の女性と結婚してもいいとしていたのです。

その時、「神は人を一体に造られたのではないか。そこには**霊の**

残りがある。その**一体の人**は何を求めるのか。神の子孫ではないか」

ということです。

イスラエルは、きちんと信仰を継承しながら神の使命を担う民です。

全諸国のために「**王なる祭司**」として務めを果たすために、

同じ**霊**を持った妻を離縁させたりしてはならない。

異教の女と結婚がだめなのは当たり前じゃないかと

突き付けているのです。

それが「あなたがたは自分の霊に注意せよ」としているのです。

霊は、神をキャッチする部分です。

霊で受け取り、夫も妻も霊を働かせて、神のみこころをなすのが、

イスラエルの民の使命です。これが

「人を一体に造られたのではないか。」かの本質です。

「霊の残り」を、聖書協会共同訳は「霊と肉」としています。

どうしてこんな訳になるのかわからないのですが・・・。

フランシスコ会訳（カソリックの訳）は、「いのちの息と肉」です。

面白いですね。

人間の表現として、霊と肉が出てきます。肉は、たましいとからだ

から出来ているとパウロが言います。そして、

霊と肉は、「霊とたましいとからだ」からなるとしています。

「いのちの息と肉」があるじゃないかと、

イスラエルは神の民であり、イスラエル同士には霊が与えられて

そこに神が働いていると訴えているわけです。

霊を働かせて一体となることが神のみこころです。

神によって選ばれたイスラエルの民たちは、

この霊の残りの意義、あるいは必要性、その存在を忘れて

異教の女性を妻とすることで、霊の子どもを生むことが出来なくな

っています。 この状況下に預言者を遣わして語られることばが

マラキ 2 章 15 節です。

創世記 2 章 21－22 節の「 あばら骨 」をマラキ書では

ルーアツハ

רוּחַ 霊としています。 神である主は「 ふさわしい助け手 」を

造るにあたって、すでに人に吹き込んだ霊を

ハツイーム ニシュマツト
רוּחַ נְשָׁמַת いのちの息 」と記しています。

ルーアツハ

(創世記 2 : 7) それは霊で、רוּחַ と同じものです。

この霊を「 あばら骨 」を通して女にも注ぎ込んだと考えられます。

最初のアダムと女は素材が違う

最初のアダムは、ちりからして造り上げた後、

ハーイーム ニシュマツト
鼻から息 (חַיִּים נְשֻׁמָּת) を吹き込んで、

ハイヤー ネフェシュ
生きるもの (חַיָּה נְפֶשׁ) になりました。

でも、女は違います。 女はちりで造られていません。

アダムの大切な「 あばら骨 」から女性を造られました。

つまり、同じ霊が存在しているのです。

それゆえ人は目から覚めた時に、

自分から女に注がれた霊を慕い、女の中にある霊もアダムの霊を

慕い、二人が結婚して一体化することで、真の満足を得るようにと

されたのです。

アダムとエバには同じ霊があると創世記で云わんとしているのです。

「 あばら骨 」が霊であることを論証する一つの手がかりとして、

マラキ書 2 章 15 節を取り上げています。

ゼカリヤ書 12 章 1 節「 人の霊をそのうちに造られた方、 」も

助けになりますが、

マラキ書 2 章 15 節は「 霊の残り 」がとても重要だとされる

箇所なのです。 これは神と人のかかわりにおいても同様です。

神と人には同じ霊がある、ゆえに他の被造物とは異なります。

世はサタンの支配下ですから、私たちの目や耳や口、触感を通して世を愛するようしむけてきますが、それは神に敵対することです。

神は私たちの内に住まわせた御霊を、あるいは霊を、

妬むほど慕っておられます。(ヤコブ 4 : 5)

神と人が一つになるためには、同じ霊で結ばれなければいけません。

ヤコブはその事実を裏付けています。

「 主は彼のあばら骨の**一つ**を取り 」

エハット

● **אֶחָד** の奥義

ヘブル語では、「 一つ 」を、ある部分とか、パーツではなく、

全体の表現としています。たとえば神の顔 神の頭 神の目

神の瞳 神の口 神の耳 神の手 神の指 神の腕 神の足 等

からだの一部分を用いながら、神全体を現わす修辞法です。

これは人間も同様です。 今回の「 あばら骨の一つを取る 」の

「 一つ 」は、あばら骨全体を表し、人の最も重要な部分である

「 霊 」を示しているのです。

「いのちの息」を吹き込まれたことで、

神と交信ができる存在となりました。それは、人間しかいません。

このような考え方は、ヘブル特有のもので「集合人格」つまり、個が全体を代表する概念につながってきます。

イエシュアのなされる包括的な事柄の概念が成り立ってくるのです。

詩篇 27 編 4 節は、ダビデの有名な詩篇です。

彼は「一つのことを私は主に願った」とあります。

一つのことですから、多くの中で、たった一つを願ったのかと思いき

や、その一つも^{エハット}תורה₁で、もっとも重要なこととして、

全体を指し示しているわけです。

ルカ 10 章 42 節のマリアに対して「必要なことは一つだけ」

を選んだとイエシュアは言いました。

その一つも^{エハード}תורה₂です。(名詞か形容詞かの違いです。)

^{エハット}תורה₁も^{エハード}תורה₂も同じ意味です。

これは神の御計画におけるもっとも重要な事柄で、

全体を意味するとともに、神の永遠の目的をも啓示する語彙です。

数ある中の一つではなくて、もっとも大切な物を選ぶ、

最も大切なものを願うこととは、神の全体を選ぶと同義なのです。

「主は彼のあばら骨の一つを取り、

そのところを肉でふさがれた」

バーサール
●肉 ^{バーサール} אָבְרָהָם の奥義

あばら骨が取られた隙間を肉でふさぐとはどういうことでしょうか。

そんなことを書く必要があるのでしょうか。

バーサール
肉 ^{バーサール} אָבְרָהָם の初出箇所でもあります。(23 節にも登場し、

24 節では 一体 ^{エハード} אֶחָד ^{バーサール} אָבְרָהָם で使われています。

ここで人が「あばら骨と肉」、つまり「霊とたましいとからだ」

から造られていると初めて記しているのです。

これをキャッチしたのがパウロです。

パウロはこの創世記にある「あばら骨と肉」から、

「人は霊とたましいとからだからなっている」と一度だけ語って

います。(Iテサロニケ5:23)

そして、ヘブル書ではたましいと霊を切り分けることが必要だとも
語りました。(ヘブル4:12)

霊と肉は違うから一緒にしたらだめなのだというのです。

パーサール

כֶּסֶף は「肉とからだ」を意味しています。

サルクス

ギリシャ語では肉を $\Sigma\alpha\rho\xi$ で表しています。

それは、たましいとからだを含んだものです。

たましいとからだは肉であるなら、

肉とは神に逆らうという語彙、霊は神と交わる語彙となります。

肉が神に逆らうのは、

サタンの支配下にたましいとからだがあるからです。

このサタンの支配を霊によって、たましいとからだを新しくするの
が神の救いなのです。

肉は、神に敵対する力となってきますが、それに打ち勝つのが、

霊です。 霊だけが、たましいを新しくします。

最終的には霊のからだに変えられることで完全にその人が神のもの

イエシュアがよみがえったその日です。

弟子たちに現れて、「 聖霊を受けよ 」息を吹きかけました。

その時から、聖霊が私たちの霊の中で、いのちの水が湧き出たのです。

神の知恵もいのちも湧き出て来るのですから、凄い事なのです。

「 あばら骨 」を肉でふさぐ記述がなかったら、

きっと人間は「 あばら骨と肉 」つまり、「 霊とたましいとから

だ 」から出来ているとパウロも受け取ることにはなかったでしょう。

パウロは、「 霊と肉 」と言い換え、また、

「 霊とたましいとからだ 」とも言い換えてもいます。

エデンの園の中央にある「 いのちの木 」と「 善悪の知識の木 」

の組み合わせは、「 霊と肉 」の組み合わせと同じなのです。

パーサー

人間が  「肉」に従って歩むとは「 善悪の知識の木 」だけ

を食べて生きることを表しています。

それは、「 罪と死の律法トラー （ローマ書 8：2） 」に従って

歩むことです。 それゆえ、人は「 善悪の知識の木 」だけを、

そこだけを取り出して、食べていると死ぬのです。

「いのちの木」とともに食べなければいけません。

「善悪の知識の木」だけを切り取って食べると、

人を罪定めして、神の意図を掴めないまま、いのちの源泉にも触れられずに死ぬよと神は警告されたのです。

人間は、「善悪の知識の木」だけを切り取って食べたがゆえにつまずいて、失敗したわけです。神はこの人間のしくじりから、救い出して、再度新しくしてくださったのです。

そのことがローマ人への手紙にあります。

ローマ人への手紙 8 章 2-4 節

- 2 なぜなら、キリスト・イエスにあるいのちの御霊の律法が、
罪と死の律法からあなたを解放したからです。
- 3 肉によって弱くなったため、律法にできなくなったことを、
神はしてくださいました。神はご自分の御子を、罪深い肉と同じ
ような形で、罪のきよめのために遣わし、肉において罪を処罰されたのです。(最初のアダムを終わらせたのですね)
- 4 それは、肉に従わず御霊に従って歩む私たちのうちに、律法の要求が満たされるためなのです。

霊によって生きる時、律法の要求が満たされるようになります。

そうなるように神様は造り変えてかえてくださるのです。

今は無理かもしれませんが、携拳された時、たましいと肉は完全な

かたちに回復します。それが ^{バーサール}
福音です。

イスラエルの民よりも教会が先に完成してしまうのですね。

ローマ人への手紙 8 章は、

私たちが霊によって生きる者であると語られる箇所です。

なぜなら、キリスト・イエシュアにあるいのちの御霊の律法が

「 罪と死の律法 」 つまり、「 善悪の知識の木 」からあなたを
解放して下さったのです。

最初のアダムを終わらせた後、三日目によみがえられて

「 いのちを与える霊 」となりました。

神は霊によって生きるようにして下さっています。

ここを受け止めることが重要です。

イエシュアが復活したことで、私たちの霊を再生して

霊の中で、神が私たちとともに住まうことが凄い出来事なのです。

イエシュアが復活して勝利されたというだけでは不十分です。

復活されたその日に、何がもたらされたのかが重要です。

それから、40日間、イエシュアが昇天されるまで、

霊によって生きるということを教えました。

それが「御国の福音」です。

「御国の福音」は、霊によって理解していくものです。

イエシュアのことばは「御国の福音」です。

それは霊のことばです。理解するには神の霊の助けが必要です。

私たちの霊がミングリングすることで、初めて理解できるのです。

この捉え方を、教会は長い間していません。

イエシュアが死から復活したことが、どのようなことかを

あまり理解できずにいます。

霊の中で生きることは、心では捉えることができません。

ボタンの掛け違いのような単純なことのようで、

理解して受け入れてもらうには、非常に難しい内容かもしれません。

霊によって生きることが、イエシュアが来た時代の宗教指導者たち

には全く理解できなかったのです。

クリスチャンも霊によって生きる御霊に属する人もいれば、

肉に属するクリスチャンもいるようです。

肉に属するクリスチャンは、幼子のようにです。

硬いパンが食べられず、柔らかいパンばかりを食べています。

硬いパンを食べる人たちは、

御霊に属する人たちで霊によって生きる人です。

この二種類があるとパウロは伝えています。

たましいで物事を考えない、たましいを通さないで

イエシュアのことばを聞くと御霊に属する人になるのです。

今日の皆さんは、創世記 2 章を御霊のことばで聞いています。

たましいで聞くと理解出来ないと思います。

「あばら骨」は、肉体の「あばら骨」ではなくて、

「霊」なのです。しかしながら、

神を現わすには、霊だけでは不十分です。

たましいも心も兼ね合わせて、神を表現するようにされています。

神は、霊から伝達してたましいを造り変えていかれます。

私たちの知性や感情や意志も造り変えていけます。

そして最後には、からだも変えられます。

これが神のご計画、なそうとすることです。

だから、からだとたましいも必要なのです。

必要だから、造られたのです。

エデンの園を追い出された時から、

サタンがたましいと肉体を支配しています。 だから、神が

霊から出発してサタンの支配に打ち勝つようにされる話なのです。

私たちは、神のことばを沢山食べて霊を育てていきます。

イエシュアの語ることばを沢山食べて、沢山聞いて、

日々食べる事で、力付けられていきます。

昼も夜も、霊のことばを聞いて生きることが私たちの務め、

「 王なる祭司 」としての永遠の務めです。

朝起きたらこの世のニュースよりも、まずイエシュアのことばを

味わう習慣が優先順位の上位でしょう。

この世のニュースを聞きすぎて、それがフェイクニュースであれば

騙されてしまいます。 今のイスラエルに起っていることを言及す

るよりも、神の最終的なご計画、

イスラエルへのお取り扱いを理解することが重要です。

そこから物事を判断するという事です。

今日の一番大切なことばは「 あばら骨 」でした。

そのために眠らせたのです。

ハヌッカーまでの期間、主日礼拝メッセージとして、

エレミヤ書 29 章～33 節を 5 回に分けて取り上げていきます。

ここを学ぶと旧約聖書の全体像がつかめて来ると思います。

神の御計画という事柄だけでなく、

神の御想いを伝える様々なことばがあります。

そういった言葉に焦点を当てようと思います。

神の奥深い心を現わすことばも注目しながら

神が実際になされる出来事も含めて語りたいと思います。

そして、今年最後のハヌッカーで、「 花嫁としての生き方 」を

学んでいきます。

「 あばら骨 」で造った女とちりて造られた男は、夫婦として

一体となります。

「 あばら骨で造った者が一体となる 夫婦が一体となる 」

一体となる大前提としての「 あばら骨 」です。

祭司しか入れない幕屋の聖所を建て上げる際の大切な箇所

ツエーラー

עֲלֵי־זָבַחは靈的な御靈に属するところなのです。

肉の部分ではありません。

そこには燭台があり、パン（神様のことば）があり、

祭司たちは務めをしています。ここは靈の領域です。

「 あばら骨 」が、靈として理解できればよいのです。

見たり聞いたりする情報は、たましいの領域ですので、

靈からの指令を、全然受けていません。この状態が靈の機能不全です。

パウロの受けた「 人は靈とたましいとからだできている 」とい

う啓示は、恐らく創世記 2 章から受けていると思いますが、

肉でふさいだことで、

「 靈によって生きること 」、勝利の生活をパウロは語っています。

キリストがしてくださった、圧倒的な勝利者です。(ローマ書 8:37)

「 神の霊と私たちの霊がともにありますように 」

神がそのようにしてくださいました。

私たちの霊と神の霊と一緒に働いて、神を証しする

霊によって生きることができるとローマ書 8 章に記されています。

パウロも、神の霊とあなたがたの霊が一つでありますようにと

語ります。 これは重要なことです。

神の霊と私たちの霊がいつも一つであるようにということ・・・、

常に、源泉の中に私たちがいるということを示す挨拶です。

霊によって生きるとは、クリスチャンの生涯の課題です。

早く理解したほうが特ですよ。

理解するためには、「 ^{イエシュア} ^{シエーム} יֵשׁוּעַ שֵׁם 」とその名を呼びます。

他のことばを要りません。 「 シエームイエシュア 」と

呼ぶなら、救われ、神の秘密が解かれる世界です。

アシュレークラスも「 シエームイエシュア 」と呼びかけます。

死と復活を現わす言い方

小麦粉は死を表し、大麦は復活を現わします。

四種類の香料にも死と復活があり、乳香は復活を表し、没薬は死を表

します。聖なる油を、聖所のすべてに塗って、神のものとして聖別しているのです。神は、「死と復活」を大前提に「夕があり朝があった」というリズムで最初から表示しているわけです。

それがアブラハムの出来事であり、エレミヤ書の表現であったりします。ささげ物の中にも死と復活はあり、

苦しみと解放、捕囚と帰還、逆のことが「死と復活」を表します。

メシアは苦しみを受けなければメシアではありません。

「十字架と復活」は、メシアが通らなければならない道なのです。

私たちも死と復活を通して、神様に喜ばれるのです。

それまでの私たちが過ぎ落とされ、新しい神への思いが与えられて

生きていく・・・それが「死と復活」です。

あなたがたの十字架を負ってわたしについて来なさいとは、

死んで生き返りたいのちで来なさいということです。

皆様が豊かに恵まれますように・・・

